



# たわわにシャインマスカッツ

Written by Benjamin Joseph Sandahl

## あらすじ

『桃割シャインマスカツ』は甲府桃割商店会の野球好きの商店主たちでつくる草野球チームだ。ある日、チームに手紙が届く。今年の親父杯争奪トーナメント大会の開催が、例年のお盆からGWに早まったという内容だ。商店にとってまとまった休みが取れるのはお盆と正月とGWだけ。GWはどの商店も家族旅行が恒例行事になっていた。大会への参加を決めたチームだが、黙っていないのが彼らメンバーの妻たち。親父杯争奪トーナメント参加を断念させるべく、彼らの息子たちとの試合を画策する。そして、迎えた試合当日。『桃割シャインマスカツ』VSこどもチームの熱戦の火ぶたが切られた。

登場人物

- 鶴岡 弘次(39) 野球チーム「桃割シャインマスカッツ」の投手 八百屋店主  
眞理子(36) 鶴岡の妻
- 岳人(14) 鶴岡の子 甲府桃割中学校野球部員 投手  
三郎(63) 鶴岡の義理父 後の「桃割シャインマスカッツ」の総監督
- 竹沢 秀二(43) 「桃割シャインマスカッツ」のレフト 肉屋店主  
絵里(37) 竹沢の妻  
匡平(14) 竹沢の長男 甲府桃割中学校野球部員 レフト  
皓平(8) 竹沢の次男
- 高田 和人(36) 「桃割シャインマスカッツ」のセンター 酒屋店主  
萌美(36) 高田の妻  
悠輝(14) 高田の子 甲府桃割中学校野球部員 センター
- 平塚 達也(45) 「桃割シャインマスカッツ」のファースト 寿司屋店主  
裕美(42) 平塚の妻
- 杉山 敦(14) 平塚の子 甲府桃割中学校野球部員 ファースト  
修(42) 「桃割シャインマスカッツ」のセカンド 洋品店店主  
由佳(40) 杉山の妻
- 翔(14) 杉山の子 甲府桃割中学校野球部 セカンド
- 小泉 高之(38) 「桃割シャインマスカッツ」のキャッチャー サラリーマン  
亜美(36) 小泉の妻  
雄介(14) 小泉の子 甲府桃割中学校野球部 キャッチャー
- 石川 直也(39) 「桃割シャインマスカッツ」のショート 蕎麦屋店主  
苑美(40) 石川の妻
- 天康(14) 石川の子 甲府桃割中学校野球部 ショート
- 手塚 寛(38) 「桃割シャインマスカッツ」のライト ラーメン屋店主  
しおり(33) 手塚の妻
- 史貴(14) 手塚の子 甲府桃割中学校野球部 ライト
- 樋口 智彦(44) 「桃割シャインマスカッツ」のサード ベーカリー店主  
美智子(42) 樋口の妻
- 公佑(14) 樋口の長男 甲府桃割中学校野球部 サード  
亜紀奈(18) 樋口の長女
- 荒川 幸三(55) 「桃割シャインマスカッツ」の監督 ドラッグストア店主  
美奈(58) 荒川の妻
- 原 朋久(55) 審判を引き受けている やきとり屋店主

野球部のコーチ

三年生A

ウェイトレス

客A

通りすがりの客

○ 荒川家・居間  
 小泉「の喉を鳴らし缶発泡酒を呷る小泉孝之(38)の喉元を。」  
 小泉「(呷り終え)プハッ、これだな！」  
 その広くない荒川家の居間に、十一人  
 の中年男たちが好き勝手に座り缶発泡  
 酒を飲んでいる。  
 白いポロシャツ姿の原朋久(5)を除き、  
 全員薄汚れた野球のユニフォーム姿で  
 ある。  
 小泉「この一瞬がために、オレは野球がやめ  
 られないんだよなあ。」  
 竹沢秀二(43)「違うな、タカちゃんのは下手の  
 横好きってえやつだ。」  
 鶴岡浩次(36)「そうさ、あれくらい捕ってく  
 れなきゃ。ピッチャーとしては全力投球を  
 躊躇っちゃうね。」  
 平塚達也(5)「よく言うわ。全力投球しても蠅  
 がとまるような球しか投げれねえくせに。」  
 小泉「あれはパスボールじゃなくてチップし  
 たの。ファールだって。トモちゃんのミス  
 ジャッジなの。」  
 原「いや、あれはバットにycastleしてねえ。」  
 小泉「チップしたって。」  
 原「いいか、審判てのは常に公平かつ正しい  
 杉山修(42)「おっ、審判のはいだまでボクも知ら  
 なかった。審判が言うじゃない。」  
 原「黙れ、わしがブルブルブツクだ。」

手塚寛(38)「そんな言葉覚えてる暇があったらル  
 ー覚えてほしいよなあ」  
 N (鶴岡岳人(ト))「この人たちが『桃割シャ  
 インマスカッツ』のメンバー。父さんたち  
 の野球チームだ」  
 鶴岡「だけどもタケちゃん、あのプレーには助  
 けられたわぁ」  
 N T 「鶴岡弘次ピッチャー」  
 「これがオレの父さん。打者に狙いを絞ら  
 せない頭脳的ピッチングが自慢のエース。持  
 要するにノーマルなだけなんだけども、持  
 ち球はストローク、曲がらないスライダ  
 落ちないフォーク」  
 竹沢「(嬉しそうに)何よ、ツルちゃん、あの  
 プレーをわかってくれないの？」  
 N T 「竹沢秀二レフト」  
 「お父さんは一試合に一度は走者を  
 刺すという隠し玉の名手。不思議なのは守  
 備位置がレフトだったところ。いったいど  
 やって走者を刺すんだろう」  
 高田和(ト)「あれでしょう、5回のあのライ  
 ナーのことでしょ？」  
 N T 「高田和人」  
 「画面、高田を捉え静止して、  
 中野輝のお父さん。優しい。世の  
 だろけど：：」  
 「きつと一生優しいん

平塚達也(45)「おお、あのライナーな。けどおめえ、ありゃあただのエラーだろう。」

N T 「平塚達也、平塚を捉え静止してに当たらない。喧嘩っ早さもチムで一番。

杉山「ちよつと待ってよ。見えないよ、何の

話よ？」  
画面、杉山を捉え静止して、

N T 「杉山修セカンド」は『1人は皆の

ため、皆は1人のために』。チムのためならず送りバントだ。打席では送りバント以外

いなくとも送りバントだよ?!」ランナーが

小泉「タケちゃんのエラーしたあのライナー

N T 「小泉孝之キャッチャー」

「雄介のお父さんはチムで唯一のサラリ

石川直也(39)「エラーはなくて、エラーした

樋口「(はにかみ)正直にっ…指を広げる。

石川「感じたままを正直に言っ…」

樋口「あの時?!」

手塚「あの時だよ」

樋口「か、感じました?!」

手塚「ヒグツつぁんはどう感じた?」

樋口「(皆の視線を感じ)ん?!」

樋口「全員が発泡酒を呷る樋口智彦(主)に注目する。」

「らいかな」

「のお父さんだからね、守備も史貴と同じくムで一番。え、守備? うん、まあ、史貴ん4番だ。打率もいいしホームランもチーN「史貴のお父さんはチームの主砲でもちろT「手塚寛ライト」

「画面、手塚を捉え静止して、」

「一番近く見てたわけだから、先ずヒグツ」

手塚寛「待って、サードのヒグツつぁんが」

竹沢「あ、何、ハイさんも俺のインタージェ」

平塚「対処も何もねえよ。ありやアマジエラ」

「もしれない」

「だの能書きタレかっ…」

「いない。だけど実践が伴わない。じゃあた」

N「野球理論なら天康のお父さんに勝る者は」

T「石川直也シヨート」

「画面、石川を捉え静止して、」

手塚「何だそりゃ？」  
 樋口「なんせ若かったろ、最初は突入5秒で  
 爆死よ。一擦りも――」  
 N「ははは：：、何のことかな。公佑のお父さ  
 T「樋口寛サード」  
 原「おつと、もうこんな時間だ」  
 平塚「なんだトモちゃん、まだいいじゃねえ  
 か」  
 原「わるいな。仕込みの時間なんだわ」  
 T「原朋久審判」  
 N「父さんたちが頼み込んで審判をやっても  
 らって『やきとり朋ちゃん』のオヤジ  
 さん。頼まると嫌と言えない性格らしい  
 けど、よく引き受けたよね。ルルも知ら  
 ないのに」  
 荒川「(2)通の封書を掲げ、皆、ちよつと聞い  
 てくれ」  
 N「この人が監督。父さんたちが楽しんで  
 やってるもんだから、自分も混ぜてほしく  
 てしようがない。だけど野球なんてやった  
 ことがない。で、監督」  
 樋口「何だ、ファンレターか？」  
 荒川「誰に？」  
 全員、自分自身を指示す。



た。父親チームに適当にあしらわれ、お情  
 けで勝たしてもらったわけだけども  
 一、二塁間にノックするコチ。  
 ボールを追うファーストの平塚敦(ト)と  
 セカンドの杉山翔(ト)。  
 一塁ベースカバーに走るピッチャーの  
 鶴岡岳人(ト)。  
 コチ「ベースカバーが遅いぞ！」  
 N「父さんたちはそれだけで終わらなかつた」  
 N「父さんたちはそれを弾くサイドの樋口公佑  
 (ト)。  
 コチ「体で止めろ！」  
 N「ソフトボールが、父さんたちの記憶の奥  
 底に眠っていた、こどもの頃に遊んだ草野  
 球の楽しさを掘り起こしてしまったわけだ」  
 N「捕球したボールをファーストに送球す  
 るシヨトの石川天康(ト)。  
 N「潜在的な野球好きの遺伝子がそうさせた  
 のかもしれない」  
 N「飛球を追うレフトの竹沢匡兵(ト)とセン  
 ターの高田悠輝(ト)。  
 N「あの日、父親チームに勝ったこどもチ  
 ムのメンバ―は」  
 N「飛球を追い捕球態勢をとるライトの手  
 塚史貴(ト)。  
 N「中学生になった今も同じ野球部のチム  
 メイトだ」  
 N「が、飛球は史貴の後方に落下する。」  
 N「コチがホームベース前にボールを転  
 がす。」

素早くボールを掴み送球するキャッチャーの小泉雄介(こいずみゆうすけ)。  
画面、青空に吸い込まれていくような  
その球を追う。  
「タイトルを追う。」  
「たわわにシャインマスカッツ」

○荒川家・居間

杉山「わかった。トレドの申し込みだ」  
高田「トレド!? トレドですか?」  
平塚「待てよ、トレドとなりやあ真剣に検

石川「そうですよ、トレドの結果チームバ  
ランスが崩れてしまえば、何のためトレ

手塚「じゃあ、誰を出しますか?」  
平塚「そうさな、出してもしてチーム力に

影響のない奴というところ。」「  
全員、考える。」

竹沢「監督だ」  
荒川「(呆れて)——」

樋口「監督と誰をトレードするんだ?」  
小泉「『石和パラダイス』の武田さんがいいん

鶴岡「『ホテル極楽』の社長の武田さんか?」  
小泉「なんでも、試合後の打ち上げはシャ



平塚「俺は参加だ。寿司屋にとっちゃんやG Wは  
 書き入れ時で旅行にゃ行かねえが、やり繰  
 りすればどうにかなる。」  
 手塚「よし、俺も参加だ。どう考えたって家  
 族サビスよが野球の方が大事もな。」  
 石川「今年の目標は親父杯を勝ち取ることで  
 したからね、私も参加します。」  
 高田「私も参加で。」  
 竹沢「もちろん俺も参加ね。」  
 荒川「樋口を見て、――」  
 樋口「俺がいなけりや野球になんないでしょ  
 うが。」  
 荒川「タカちゃんには？」  
 小泉「サリマンに休みの悩みはございま  
 せん。」  
 杉山「皆が参加なら私も参加ですな。」  
 荒川「あとはあ：：ツルちゃんか？」  
 鶴岡「（思案）うん：：ツルちゃんのか？」  
 手塚「どうしたよ、都合がわるいのか？」  
 鶴岡「GWの家族旅行は義理父さんの時代か  
 らの恒例行事なんだわ。」  
 荒川「そうか、ツルちゃんには婿養子だったな。」  
 鶴岡「昨年、店を改装したろ。あの頃から  
 かなあ：：」  
 樋口「義理父さんとうまくいったのか？」  
 鶴岡「そいう訳じゃないの。」  
 竹沢「改装反対だったか？」  
 鶴岡「否、改装は義理父さんから言い出した  
 ことだし：：」

杉山「売り上げが落ちたとか？」  
 鶴岡「いや、増えた」  
 石川「だったらいじゃないですか」  
 鶴岡「(思案) そうなんだ。じゃ、  
 高田「監督、もう一通の手紙は？」  
 荒川「おう、去年の秋に合宿した民宿の『芝  
 刈荘』からだ。GWも部屋を空けて待つて  
 来るから是非来てくれ。GWに誘いの手紙よ」  
 小泉「余程暇なんだね。GWに団体客を誘致  
 するようじゃ」  
 平塚「仕方ねえよ、近くに観光名所があるわ  
 樋口「けど、温泉が湧いてるわけだし」  
 杉山「飯もまあまあだったんじゃない」  
 手塚「そう、風呂だった広くてさ」  
 荒川「まあ、『芝刈荘』の方はまた合宿でも  
 するときに考えようじゃねえか」  
 鶴岡「鶴岡の少し憂鬱そうな表情を」  
 鶴岡「鶴岡(36)の声(先行して)「毎年決まっ  
 ている事じゃない」  
 ○甲府桃割商店街・フレッシュ鶴岡・表  
 店の奥の陳列棚に野菜や果物を並べて  
 いる鶴岡三郎(38)・鶴岡の義理父」  
 店先で言い争いをしてる鶴岡と妻の  
 真子「だか言ってるだろ、今年は親父杯争  
 奪トナメントの開催がGWになっちゃって  
 真子「チム大会に参加するのと、あ  
 真子「チム大会に参加するのと、あ

だ。従うのが家族の勤めだ。：：「  
 三郎「（素っ気なく）家の主がそう言っ  
 真理子「おじいちゃん、ただいま」  
 三郎「あぁ、お帰り」  
 岳人「おじいちゃんも何とか言っ  
 てよ！」  
 い。三郎「裏切り者!! ちゃんも信  
 真理子「この裏切り者!! ちゃんも信  
 岳人「別にいいじゃない」  
 行かないって言いだしたの」  
 家族が何よりも楽しみにしているG  
 真理子「驚いちゃダメよ。いい、父  
 岳人「何のことさ？」  
 の？」  
 真理子「（考え）——。あんたは敵  
 岳人「昨日、焼肉屋へ行ったじゃない  
 う言ってるのよ」  
 た。ただブドウと桃だけを食べて生  
 地の奥に閉じ込めて、何の楽しみも  
 真理子「あんたの父さんはね、家族  
 岳人「どうしたのさ？」  
 鶴岡「お帰り」  
 鶴岡「（困惑）なあ、真理子：：」  
 鶴岡「学校から帰ってくる岳人。」  
 真理子「我家の家族が四人しかいな  
 鶴岡「うちの九人の選手しかいない  
 なたが参加することは別問題でしょ  
 う」

真理子「まったくどういつもこいつも」  
鶴岡「(三郎を窺う) ……」

○ファミリ―レストラン・駐車場(夜)

岳人「車が停車し、降りてくる真理子と岳人。  
のさ」

真理子「家族の問題でしょう」  
岳人「ったくう」

○同・店内(夜)

店内の一面を占めている『シャインマ  
スカッツ』のメンバーの家族たち。  
すなわち、高田の妻、萌美(36)、と悠輝、  
弟の光輝(11)。

杉山の妻、由佳(40)と翔。

平塚の妻、裕美(42)と敦、あさみ(10)。

手塚の妻、しおり(33)と史貴。

石川の妻、苑美(40)と天康、弟の慎平(10)。

小泉の妻、亜美(36)と雄介。

樋口の妻、美智子(42)と公佑、姉の亜紀

奈(17)。

竹沢の妻、絵里(37)、匡平、弟の皓平(6)。

そして荒川の妻、美奈(53)。

萌美「(手招きをして)こっちこっち」

真理子「やって来て、席に着く真理子と岳人。

美奈「当たり前だろ、監督の奥さんまで」

岳人「(チームメイトに挨拶)よう」

GWは潰され

真理子「で、どういうことになってます？」  
 裕美「とにかく、親父杯争奪トナメントへ  
 の参加は絶対阻止」  
 敦「無理無理無理」  
 ウェイトレス「ご注文はお決まりですか？」  
 岳人「メニューを開き」え「と」  
 真理子「岳人のメニューを取りあげ」ドリン  
 クバーニつ」  
 岳人「不満そうに立ち上がり」母さんは？  
 真理子「アイスコ―ヒ―。ガムシロなしのミ  
 ルク2つ」  
 匡平「あ、オレも行く」  
 と、岳人と飲み物を取りに行く。  
 翔「いいんじゃない、家族旅行なんてさ。こ  
 どもだって大きいんだし」  
 絵里「だからそこ、限られた家族水入らずの  
 時間を潰されたくはないんじやない」  
 天康「そういう微妙な心境を僕ら多感な青少  
 年理解しろったって無理ですよ」  
 苑美「天康の頭を小突き」能書きはお父さん  
 だけで充分」  
 由佳「問題はどうかやって参加を阻止するかよ」  
 母親全員、考える」  
 亜紀「簡単じゃない」  
 亜紀「全員の視線が亜紀奈に集まる。」  
 亜紀「少し臆して」  
 しおり「何か考えがあるの？」  
 亜紀「薄笑みを浮かべ」私ね」  
 亜紀「全員、亜紀奈に注目している。」  
 亜紀「新しいスマホが欲しいかも」



こどもたち「食べたいたい食べ物はい食べたい」  
 亜紀「あんな食べたいたい食べたい？」  
 さ「あ、何で姉ちゃんだけそんな頼むの」  
 公佑「あ、ペシヤルパフェを一つください」  
 亜紀「（ウエイトレスに）はい、お願いします」  
 亜美「（溜息）「かなかのアイデアだと思っ  
 た」  
 亜紀「あ、そ。それじゃ仕方ないわね」  
 たちは単純ではありませよ」  
 天康「そんな誘導尋問的な挑発に乗るほど僕  
 ちには勝つ自信がないんでしよう」  
 亜紀「わかった、あんなでしよう、お父さんた  
 と、テブルの下に沈んでい」  
 雄介「プクプクプク」  
 悠輝「関係ないじゃん」  
 公佑「エ?! 何でオレたちなのさ？」  
 亜紀「公佑たちが決まってるじゃない」  
 萌美「じゃあ誰がやるの？」  
 お父さん「あたちに勝てると思う？」  
 亜紀「（呆れ）お母さんたちが野球やって、  
 美智子「ちよっとなんか待って。私、野球なんてや  
 ち絶対断らないはずよ」  
 亜紀「母親たち、顔を合わせる。お父さんた  
 と思う？」  
 亜紀「そんな決闘、お父さんたちが受ける  
 亜美「ジャンケンとかクジとか？」  
 亜紀「そんな決闘、お父さんたちが受ける  
 よ？」



美奈「契約成立だね」

翔「おお、神よ」

史貴「（経を唱える）南無妙法蓮華経：：」

悠輝「今日という日は絶対忘れないぞ」

天康「（涙ぐみ）産まれてきてよかったぁ」

雄介「ブクブクブクブクブクブクブク：：」

公佑「一人、悲しそうな敦。浮かしてくる。

敦「（悲しそうに）：：」

公佑「（意に關せず）Wラツキじゃん、こ

の幸せ者」

敦「（悲しそうに）：：」

○甲府盆地・俯瞰（夜明け）

○甲府桃割商店街

午前中の疎らな買物客。

○同・『アラカワドラック』・店内

る荒川。レジカウンスで客Aの精算をしてい

客A「その脇で商品棚を整理している美奈。

荒川「鼻炎用ね。花粉かい？」

客A「そうなの。ちよど切れちゃって」

荒川「鼻炎用ね。花粉かい？」

客A「そうなの。ちよど切れちゃって」

荒川「（美奈に）おい」

美奈「はいよ」



荒川「あれ、そこにいた筈の美奈はいない。  
 美奈の声「何だい？」  
 真理子たち一団を掻き分け最前列に現  
 荒川「おまえ、いつの間に……」  
 一団「厳しい表情で――」  
 荒川「臆して」な、何だよ」  
 美奈、紙に包まれた書状を荒川の顔前  
 荒川「（目を凝らし）何だ？」  
 美奈「（真理子たちに）ちよっとタンマね」  
 美奈「ほら、これ掛けて」  
 美奈「再び真理子たち一団の先頭に戻  
 り、書状を荒川の顔前に突き付ける。  
 「決闘状」と書かれた書状を――。  
 樋口の声（先行して）「決闘状?!」  
 ○同・『やきとり朋ちゃん』・店内。  
 カウンターで「決闘状」に見入る樋口。  
 鶴岡を除く『シヤインマスカッツ』の  
 メンバーが耐ハイのグラスを傾けてい  
 る。  
 荒川「そ、決闘状だ」  
 平塚「（拳の関節を鳴らし）おもしろえ、受け  
 てやろうじゃねえか」  
 荒川「慌てるな、喧嘩じゃねえよ。野球の試  
 合で決闘しようってんだ」  
 竹沢「野球で?! 相手は？」

荒川「（竹沢を見て）——」  
 竹沢「（荒川を見て）——」  
 荒川「全員が竹沢と荒川に注目している。」  
 荒川「（ニヒルに笑む）——」  
 間——。  
 竹沢「イイ！ 監督、その顔イイ!!」  
 荒川「はあ?!」  
 樋口「どんな顔よ？」  
 竹沢「（荒川の顔真似）」  
 平塚「違う、（荒川の顔真似）」  
 杉山「見えないよ。」  
 石川「（荒川の顔真似）」  
 小泉「（荒川の顔真似）」  
 高田「（荒川の顔真似）」  
 手塚「（荒川の顔真似）」  
 原「（やきとりを焼きながら）——」  
 鶴岡「（入ってきて）——」  
 何か——（と、固まってしまっ）  
 メンバ——全員が、荒川の顔真似で鶴岡  
 に顔を向いている。  
 × × ×  
 杉山「（朋ちゃん、おかわり）」  
 荒川「と、空の耐ハイグラスを掲げる。」  
 鶴岡「（じゃあ、決闘は受けていいんだな）」  
 竹沢「（メンバに参加できるもんない）」  
 荒川「（誰か異存ある者はいるか？）」  
 高田「（怒鳴る）——」

真理子「（咳払い）あのね、これはあくまでも  
 絵里「他に私たちができることは？」  
 由佳「この日もたちには試合までスタミナのつ  
 亜美「強がり言っちゃって」  
 美奈「試合にならないうのハンデはくれてやらない  
 しおり「それしいたら？」  
 美奈「この日もたちは野球部で毎日練習してい  
 苑美「また随分急じゃない」妻たち。  
 ○ファミリ―画を占拠している『シャインマスカ  
 美奈の声（先行して）「今度の日曜だとさ」  
 手塚「いつよ？」  
 荒川「ま、断るとも思えなかつたんでな、一  
 石川「まあまあ、落ち着いてください」  
 平塚「（泥酔）百万年早えっただだ：：」  
 あ?!（怒鳴る）野球をナメるな!!」  
 分際で、こともあろうに野球で親に決闘だ  
 高田「どうしたい、カズちゃん？」  
 高原「どうしたい、カズちゃん？」  
 「ガキの

試合に勝つたために提案するんだけど：一つの。
 誤解しないでね。試合に勝つための一つの。
 手段なんだからね。ハッキリ言いなさいよ。
 美智子「何よ？ 誤解しないでよ。私は別
 にどちらでもいいんだけど：：」
 裕美「だから何なのよ？」
 真理子「あのね：：」
 真理子「全員が真理子に注目する。」
 美奈子「だから何なんだい？」
 真理子「わかった、言うわよ。だから：：」
 本腰じゃない。だからあ：：」
 顔を寄せ合ひ聞き入る妻たち。
 〇甲府盆地・俯瞰（夜）
 「イヤン」 「キャ」 「うそ」 等
 の黄色い声が夜の甲府盆地にこだます
 る。
 〇甲府桃割商店街・「鮎平」・表
 掃き清めた店前に打ち水を打つ裕美。
 堆積まれた寿司桶に埋もれ、フラフ
 ラと自転車を漕いで帰ってくる平塚。
 裕美「（驚き）ど、どうしたのあんた、自転
 車なんかで？」
 平塚「へへ：：」
 下塚「行っただけじゃん」
 下塚「行ってたんじゃ」

裕美「あんなた!？」  
自転車が倒れ、桶の崩れる激しい音。

○同「辰巳庵」・店内

蕎麦を食べている客一人。  
その客の茶碗にお茶を注ぎ足している

鶴岡「た、大変だ！」  
「鶴岡さん？」

苑美「ど、どうしたの、鶴岡さん？」

石川「調理場から飛び出てくる石川。」

○同「鮭平」・店内

右腕を三角巾で吊った平塚。

その脇に立つ裕美。  
二人を取り囲むように小泉を除く「シ

平塚「(落胆)すまねえ」  
「のメンバ―たち。」

鶴岡「へいさん、仕事は？」  
「に

裕美「親店の若い衆が手伝いに来てくれるこ

とになつて、仕事の方は：：「来てくれるこ

平塚「店はどうかなるが、日曜の試合にや

間に合いますか？」  
「深々と頭を下げ」

杉山「へいさん、そういうこともあるよ。な、

石川「そうそう。それより、ケガが大したこ

裕美「（困惑）鶴岡さん、樋口さんまで」  
 平塚「（涙ぐみ）カズちゃん、ありがちな」  
 高田「へい、さ、の無念、ようく解ります。私  
 裕美「ちよ、ちよ、と、高田さん?!」  
 裕美「（困惑）あんた：：」  
 平塚「（土下座）頼む！」  
 裕美「（困惑）何二十年以上も前の話を：：」  
 平塚「こいつは高校時代にソフトボールで国  
 や：：」  
 荒川「へいさん、気持ちは嬉しいが奥さんじ  
 裕美「（驚き）な、何言ってるの?!」  
 平塚「オレの代わり、出てくれ（土下座）」  
 裕美「？」  
 平塚「裕美の前、手をついて正座する平塚  
 腕じゃ無理だよ」  
 裕美「そんなこと言ったって、あんな、その  
 ちまったら、皆に申し訳がたねえ」  
 メントだ。オレのケガで参加できなくなっ  
 止してまで参加を決めた親父杯争奪トナ  
 平塚「待って。参加を。皆がGWの家族旅行を中  
 荒川「そう、ここは潔く不戦敗というこ  
 となく、よかったです。じゃないですか」

亜美 「主人が車で山の中を走っているときだ  
 マスカット『のメンバ―の妻たちが楽  
 店内の一画を占拠している』シャイン  
 フアミ―レスラン・店内（夜）  
 ○  
 鶴岡・樋口「（土下座）お願いします！」  
 荒川「奥さん、ヘイさんの気持ち、汲んでや  
 ってもらえねえかな」  
 全員「（土下座）お願いします！！」  
 小泉「皆の土下座に面食らい）な、何やって  
 んの!?」  
 竹沢「突っ立ってないで、タカちゃんも――」  
 小泉「え?! あ、ああ、そういうことね」  
 鶴岡「ほら、皆の後方に正座する。お願いして」  
 小泉「わ、わかっている。奥さん、もう二度と、  
 ヘイさんをフイリピンクラブには――」  
 杉山「（慌てて）な、何言ってるの?!」  
 小泉「え、ロサリ―のことでじゃないの？」  
 平塚「（唇の前に指を一本当て）アホ！」  
 小泉「と、とにかく、離婚だけ――」  
 手塚「（しみじみと）バカ：：」  
 荒川「おまえは何しに来たの!？」  
 小泉「だ、だって、ヘイさんたち夫婦の危機  
 だ、って、から：：」  
 （先行して）女たちの笑い声――。

裕美「仕方がないじゃない、土下座までされち  
 苑美「子の薄笑みを浮かべ美奈を窺う妻たち。  
 美奈「それね、関係ないだろ」  
 美奈「よしとくれば、この計画は？」  
 美奈「何を今更」  
 美奈「監督の奥さん、皆、まだ知らないでか？」  
 美奈「あれま、あ、まだ知らないでか？」  
 裕美「ちょっと羨ましかったかな」  
 由佳「妻として、は、ちよつと妬けるわよね」  
 絵里「仲いいだけね、あいつら」  
 亜美「仕事もそれぐらい真剣にやってくれた  
 し「お駆付けただけで、お宅の旦那、半日休暇取っ  
 美智子「本当に。監視を強化しなくちゃね」  
 苑美「どこで何してるかわからないわね、あ  
 亜美「とっちめフイリピンクラブか」  
 し「おめでたいよっ、聞こえちやっただ、揉  
 真里「子、鯨平さん夫婦にヒビがはいった、折  
 のよ。鯨平さんよっ腕にヒビがはいった、折  
 ったみたいで、ケ―タイの感度が悪かった」

「や」

亜美「と、うことは、私たちの敵？」

裕美「そんなことは言わないでよ。旦那の代わ

りに出ても私は皆の味方だからね」

真理「わかんないわよ。旦那に頭下げられ

て惚れ直しちゃったりして」

美奈「裕美を冷やかす妻たち。それより、見

捨ないでよ。ね」

楽しそうですね。話す妻たちを。

○甲府盆地・俯瞰

スパーマーケット・店内

○甲府

「春の土用丑の日」と掲示された一画

に陳列されたうなぎの蒲焼き。二本の腕。

そのうなぎの蒲焼きに伸びる二本の腕。

うなぎの蒲焼きを手にとった佳と絵

里がお互いほほい気付く。笑いふふ、

○同・

『洋品の杉山』表

杉山が店頭の商品を整理している。

買い物を下げた由佳が「ただいま」

杉山「(立腹)どこ行ってたんだよ?!

由佳「夕飯の買い物よ」

杉山「(立腹)夕飯買ってねえ——」

由佳「(買い物袋を掲げ)う・な・ぎ」

杉山「うなぎ?! (渋々)まあ、そういうこ

となら。明日は試合もあることだし……」

由佳「そう。じゃ、お店お願いね」

杉山「お願いねって、おい、どっかへ行くの

か?」

由佳「何言ってるのよ、夕飯の支度に決まっ

てるでしょ?」

杉山「と、鼻歌混じりで店内に消えていく。」

○ 甲府盆地・俯瞰

午後 陽光——。

○ 甲府桃割商店街(夕)

夕刻とはいえまだ陽は高い——。

○ 同・『ヒグチベ——カ——表(夕)』

樋口「(店内へ)おい、本当にいいの?」

美智子の声「(店内から)いいのよ、明日があ

るんだから、今日は早いよ」

通りすがりの客「あら、もうお仕舞いな?」

樋口「ええ、今日はちよっと都合で」

シヤッタ——を閉じる樋口。

○ 同・『ホームラン軒——表(夕)』

暖簾を下ろした入口の戸に

「本日、都合により午後4時に閉店  
させていたいただきます。」  
ホームラン軒店主

○同・「肉の竹沢」・表（夕）

夕闇――。  
閉じられたシャツタ―に貼ってある早  
仕舞を告げる貼り紙。

○同・同・リビングダイニング（夕）

台所で食器を洗っている匡平と皓平兄弟。  
一人テ―ブルに座り、うなぎをつつき

絵里「ながら早く終わるのもいいでしょう、

竹沢「毎回じゃお客さんが怒りだすわ」  
匡平「夕飯早すぎ。これじゃ寝る前に腹減っ

絵里「何言ってるの、明日はお父さんたちと

試験でしょ。そのためにお店まで早く閉め  
たんだから、もう寝なさい」  
匡平「もう寝なさい、まだ6時前だよ?!」

竹沢「おい、そりゃちよつと可哀相――」

絵里「あんたは黙って！」  
匡平「いくらなんでも6時は――」  
絵里「（鬼の形相で）寝なさい!!」



岳人「（寝呆け）地震?!」  
突然、ベッドから上半身を起こす岳人。  
やがて、眠そうにベッドに倒れ込む。

○甲府盆地・俯瞰（早朝）

○同・河川敷のグラウンド・駐車場（朝）

二台の車が次々と止まり、一台目の助手席から真理子が、後部座席から亜美、後部座席からはユニフォーム姿の岳人が、  
てくる。ユニフォーム姿の雄介が降り

岳人「（雄介に）おう」

岳人「なあ、夜中に地震なかつた?」

雄介「地震? あったかなあ? あっ、それよかさ、日本の狼って絶滅したんだよな?」

岳人「どして?」

雄介「昨晚、鳴いてたんだよ。うおんおお

岳人「まさか。犬の遠吠えだろ」

雄介「絶対犬なんかじゃないって。吠え方に

野生を感じたもん」

真理子「（亜美に）おはようございます」

亜美「おはようございます」

（挨拶をする真理子と亜美の頬が陽光に  
それを誇げみ）  
それを見て、真理子と亜美、急に「ホ

樋口「っ、てこはタケちゃんもか?!」

竹沢「(驚き)ヒグツ、ちゃんもか?!」

樋口「い、やな、実は、昨夜、襲われ、ちま、ってさ」

竹沢「ど、したの、ヒグツ、あ、ん?!」

と、立ち上がる。腰が砕け、手で腰を押さえる。

樋口「しゃあない、キャッチボールくらいす

手塚「あと10分で試合開始だ」と

一塁側ベンチ

はあと10分「と告げる審判の原。

練習して、いる、と、その、子どもたち、の、裕美も

三塁側のベンチで、楽しそうに、お喋りを

「(右腕を三角巾で吊った平塚もいる)」

「いる」

一塁側のベンチで、怠そうに、体を休めて

子供たちが練習をしている。

○ 同・同

を見上げ、深い溜息を一つつく。

二台目の車の運転席から降りてきたユ

情のユニフォーム姿の鶴岡が降りてく

一台目の車の運転席から疲れ果てた表

ホホホ：「と上品に笑いだす。

見送る悠輝。鶴岡、第一球を投げる。フア|ストを守る裕美。鶴岡がキヤツチャ|のサインを窺う。バツタ|ボツクスに立つ悠輝。原「プレイボ|ル！」×××

恥ずかしそうに頬を押さえる美奈。一斉に美奈を見たりした表情の妻たちが。それを見て啞然とした表情の妻たちが。川°。壘側ベンチで腰を庇い立ち上がる荒。一壘側ベンチで腰を押さえながら立ち上がる平塚°。それを見た妻たちが一斉に裕美に顔を向ける°。裕美「(恥ずかしそうに)一応、私もこちら側じゃない、だから：：」

美智子「それ、：：」

苑美「見て、激しかったみたいね」

腰が砕けヨロける°。立ち上がった樋口の。一壘側のベンチで立ち上がった樋口の。三壘側ベンチ|×××

荒川「(咳く)やられた」×××

樋口と竹沢のやりとりを聞いていた鶴岡と小泉が驚いたように顔を合わす。



投 げ る 岳 人 。  
 ×  
 ×  
 ×

は 刺 守 ン 非 壘 匡 匡 竹 匡 竹 匡 竹 原  
 ま せ 備 ン 難 ラ 平 平 沢 平 沢 平 沢 原  
 る よ っ 位 チ 難 ラ 平 平 沢 平 沢 平 沢 原  
 う て 置 の 妻 ブ 壘 平 試 走 っ 何 何 何 何 平  
 × じ こ が ち の ブ 壘 平 合 っ た 何 何 何 何 平  
 × オ は フ ト だ 壘 平 中 っ た 何 何 何 何 平  
 × た か っ っ 壘 平 中 っ た 何 何 何 何 平  
 × ち っ っ っ 壘 平 中 っ た 何 何 何 何 平  
 × ま っ っ っ 壘 平 中 っ た 何 何 何 何 平  
 × だ こ 球 走 者 壘 平 中 っ た 何 何 何 何 平  
 × ま な 術 中 壘 平 中 っ た 何 何 何 何 平  
 × 未 熟 だ 壘 平 中 っ た 何 何 何 何 平

一 瞬、それが風で翻る。  
 樋口。それを見逃さず鼻の下を伸ばす  
 カキン！ 堤の上に向けた。樋口の脇をボ  
 テボテのゴロが転がっていく。  
 × マウンダ上で協議していた『シャイン  
 マスカット』のメンバ―たちが各守備  
 位置に散っていき。  
 原「プレイ（と、再開を告げる）」  
 一塁走者の匡平がリ―ドを取る。  
 ランナ―を窺うピッチャ―の鶴岡。  
 竹沢「おい、匡平、おまえ何やったんだ」  
 と、レフトから走ってくる。  
 匡平「え?!」  
 竹沢「何やったんだよ、おまえは」  
 匡平「何のことさ、お父さん?」  
 竹沢「走ってきた竹沢に近寄る匡平。」  
 匡平「試合中に何なの?」  
 原「一塁ランナ―、アウト!」  
 原「一塁ランナ―、アウト!」  
 原「一塁ランナ―、アウト!」



岳人が、  
 投げると、  
 ライト方向に打ち上げる樋口。  
 捕球態勢を取るライトの史貴。  
 史貴の後方に落ちる飛球。  
 歓声を挙げる一塁ベンチの『シャイン  
 マスカッツ』のメンバたち。  
 余裕の走りで一塁を周りガッツポーズ  
 を取る樋口。  
 史貴の後方に素早く走り込んだセンタ  
 ーの悠輝が、転がるボールを掴み返球  
 する。翔がそのボールを中継し、ホ  
 ムに投げる。上に立っていたキャッチ  
 ャーの雄介のミットにボールが帰って  
 くる。周ってきた竹沢がホームベース  
 三塁を周ってきた竹沢がホームベース  
 手前で立ち止まる。竹沢がホームベース  
 え?!  
 原「ア  
 ウト！側のベンチから妻たちの歓声が上  
 がる。ポードの4回の裏に0を書き込  
 む原。  
 鶴岡が投げる。  
 公佑が打つ。  
 ショートの深い位置で体勢を崩しながら





原「ボルト。投げる。ボルト」  
 原「ボルト」  
 原「プレイ」  
 雄介「バッターに集中してくぞ」  
 敦「ドマイドマイ」  
 公佑「まだ同点だ。締めてけよ」  
 はしゃぐ一塁側ベンチの妻たち。  
 落胆する三塁側ベンチの妻たち。  
 る原。スコアは1対1の同点である。  
 スコアボードの裏に1を書き加え  
 原「腕を頭上で回し）ホームラン」  
 N「やらセンのタの奥に転がっていくボールを。  
 余裕でホームに帰って来る手塚。  
 打球を追いつ全速力でバックするセンチ  
 キン！  
 岳人、投げる。  
 貴のお父さんに――  
 レ「たの勝ちだ。だけど、警戒していた史  
 N「7回の裏、最終回。この回を抑えればオ  
 岳人。キャッチャー（雄介）のサインに頷く  
 スに入る手塚。  
 レイ「の宣言があり、バッターボックス

原「ストライク。ツワン」  
 原「ボ、スリワン」  
 雄介「肩の力を抜け」  
 原「ボ、フオアポル。バッター、テイ  
 クワベル。歩く石川。バッター、  
 フアーストに歩くと、  
 歓声を上げる。壘側ベンチ。  
 一壘側ベンチに出る前に荒川を見  
 ー壘側ベンチ前に出る前に荒川を見  
 バッターボックスに入る前に荒川を見  
 る鶴岡。腕をハの字に下げ、その後、  
 荒川の両腕をハの字に下げ、その後、  
 頭の（向かって）右側で掌を2回振る。  
 三壘側ベンチ  
 三壘側ベンチ  
 荒川のしぐさを見ていた妻たち。  
 絵里「あれ？」  
 美智子「サインじゃない」  
 苑美「わかった。ハに点々でバ。バントって  
 こじやない」  
 しおり「まさか、そんな解りやすいサインじ  
 やサインの意味がないじゃない」  
 亜美「そりゃそうよね」  
 岳人「投げる。鶴岡。  
 一壘側にバントする鶴岡。  
 三壘側ベンチ  
 三壘側ベンチ  
 呆れ顔の妻たち。



盗塁に走る二塁走者の石川と一塁走者  
 の鶴岡。ワシバウドの投球を胸に当てて止める  
 雄介。だが、送球はできない。  
 雄介「岳人、バッターに集中だ」  
 雄介「内野、バックホームに備えろよ」  
 雄介「投げる岳人。」  
 打つ小泉。岳人のグラブに吸い込まれ  
 る。  
 原「アウト！」  
 三塁ベースからリードを取っていた石  
 川が素早くベースに戻る。  
 雄介「川が素早くベースに戻る。」  
 雄介「大きく息を吐く岳人。」  
 雄介「ワシバウトワシバウト」  
 翔「集中集中！」  
 雄介「岳人、落ち着いてけ」  
 雄介「額き、投げる岳人。」  
 キン！ 打球は内野フライ。  
 樋口の打球は内野フライ。  
 マスクを飛ばし、岳人を指さし、  
 雄介「よし。ピッチャー」  
 原「インフィールドフライ！ バッター、ア  
 ウト」  
 内野フライを捕球する岳人。  
 一塁側ベンチ  
 荒川「何だ？」

裕美「内野手がわざと落球してダブルブレ  
 をさせないため、トルよん、いつの間に  
 平塚「（大声で）何だ、トモちゃん、い  
 そんナール覚えたのよん、立つ原、ズボ  
 ンの  
 ホ丨ムベ丨ス後ろに立つ原、ズボンの  
 ポケットからポケット出版野球ブルブ  
 ックを取り出し、ト版野球ブルブ  
 原「俺の愛読書を知ってっか？ ル丨ルブッ  
 クよ」  
 杉山「トモちゃんのこと見直しちゃったよ」  
 荒川「俺も知らねえ、ル丨ルを知ってるとはな  
 原「インフイ丨ルドフライ宣言。一度やっ  
 みたかったのよ」  
 マウンドの岳人の周囲に集まる雄介、  
 敦「よし、あとワナウトだ」  
 翔「バッテリーに集中しようぜ」  
 す。  
 石川「（拍手して）さすがトモちゃん、よく勉  
 強してますね」  
 原「なあに、審判として当然のことをして  
 天康「あっ」  
 公佑「どうした？」  
 石川「では当然、こんなル丨ルも知ってま  
 よね」  
 と、両手を腰にあてスキップしてホ  
 ムに向かう。





高田「内容的にはお父さんたちが優れて  
 史も完成したし「お父さんたちが優れて  
 史貴「オレの守備をカバーする新しいシフト  
 悠輝「試合には負けなかったけど、内容的には勝つ  
 公佑「その負けるときもあるさ」  
 岳人「お情けで勝つても嬉しくないよ」  
 なあ、皆「勝負師としてはできん相談だ。  
 ともないが、勝負師としては考えられないこ  
 荒川「スポーツマンとしては考えられないこ  
 てみちやどうだい？」  
 たらもスポーツマンならこの1点を返上し  
 美奈「どうだい、リッパじゃないか。あん  
 翔「悔しいけど、ね」  
 敦「しょうがないよ」  
 美奈「でもいいのかい。この点が入ると負け  
 由佳「怪しいもんね」  
 マスカット「メンバ―たち。シャイン  
 腕を組んでウンと頷く『シャイン  
 て当然だ。あたり前だろ。野球をやる者とし  
 小泉「あ、当たり前」  
 雄介「（小泉に）お父さんもわかってたの？」  
 マスカット「腕を組んでウンと頷く『シャイン  
 腕を組んでウンと頷く『シャイン

手塚「そう、俺のホームランもあつたしな」  
 悠輝「いや、オレたちだよ」  
 平塚「客観的にみて俺たちだよ」  
 史貴「オレたちだよ」  
 竹沢「じゃあ勝負するか？」  
 荒川「待って待って。この試合は、私の勝ちだよ」  
 石川「お、いいですね。私たちが勝てば完  
 全勝利というシヤインマスカッツの完全勝利は  
 荒川「我々が8回の表を抑えれば8回の裏は  
 ない。『シヤインマスカッツの完全勝利は  
 天康「う、この表で同点か逆転したらどうなる  
 のさ？」  
 荒川「同点となれば8回の裏の我々の負けだ。ただし、  
 ある。逆転されれば我々の負けだ。この試合の  
 どのような結果になろうとマスカッツの試合の  
 雄介「そう、『シヤインマスカッツの試合の  
 匡平「8回の表で逆転したら受けて立つと、皆」  
 岳人「実力の違いを見せやろうぜ」  
 N「試合はオレたちが負けた。でも、本来は  
 ない。8回の表で逆転したら負けた。でも、本来は  
 言えばお情けなな、と父さんたちも、  
 そしてお情けなな、と父さんたちも、  
 っただ」

原  
 「セ  
 歓声の上がる三塁側ベンチ。  
 タツチすする杉山。  
 ニ塁ベリスに滑り込む公佑。  
 キヤッチャーの小泉がセカンドに送球。  
 一塁ランナーの公佑が二塁に走り、  
 鶴岡、投げろ。  
 三塁側ベンチから妻たちの声援。  
 雄介がバットタポックスに入ろ。  
 歓声の上がる三塁側ベンチ。  
 一塁ベリスを駆け抜ける公佑。  
 杉山。  
 内野ゴロをファンブルするセカンドの  
 公佑、打つ。  
 マウンド上の鶴岡が投げろ。  
 る。  
 三塁側ベンチから妻たちの声援が掛か  
 公佑、バットタポックスに入り構える。  
 佑。  
 バッテリーボックス前で素振りをする公  
 エンジンが散開する。  
 オ！  
 桃割中、ファイ！  
 匡平「大切にしてよ」  
 翔「大転すぞ」  
 岳人「もチム」  
 三塁側ベンチ前でエンジンを組むこと  
 コアボードを。  
 ×  
 ×  
 ×







N 「15対1°3回コ|ルド°一方面的な試合展  
 ○同・選手通用口  
 ルをナ N 「念願叶いに続き、落胆の響きを  
 〇山梨県営球場・表打球音°  
 N 「試合には妻たち、そし  
 杉山「ま、そうだろね」  
 荒川「複雑なサイン出してもおまえたち覚え  
 竹沢「うちのサインはサインの意味ないね」  
 よ「誰が見てもわかるようないなサインだから  
 荒川「俺のサインはその場ですぐ作れるから  
 鶴岡「第一、そんなサインあったか？」  
 石川「あれ、オレも知らないル|ルとか何と

開で父さんたちは見事：  
：：  
：：、一回戦敗  
退

○ 民宿『芝刈荘』

板切れにペンキで書かれた民宿『芝刈  
荘』の看板。  
その後方に建つ昭和のアパートのよう  
な建物を。  
建物の奥にはグラウンドが広がっている。  
聞こえてくる打球音や歓声――。

○ 『芝刈荘』・グラウンド

N 「GWの予定を1日で終えてしまった父さ  
んたちは、急遽『芝刈荘』で合宿に入るこ  
とになった」

N 「なぜオレたちも一緒にこの週末と――  
父親に指導を受けることもたち。

ベンチでお喋りを楽しんでいる『シヤ  
インマスカッツ』のメンバーの妻たち。  
周りで遊んでいる慎平、あさみ、光輝、  
皓平。

N 「この合宿は家族旅行も兼ねている亜紀奈。  
木の陰でスマホを操作している亜紀奈。

N 「ただGWに家族旅行も兼ねている亜紀奈。  
いらだたは『芝刈荘』だけだったらしい  
の。『フアーストの守備についたノックを受  
けている平塚と敦親子。腕は治  
敦のお父さんも合宿に参加した。腕は治



原「ストライク、バッター、アウト！」

○同・宴会場（夜）

浴衣姿で宴会の席に着く『シャインマスカッツ』のメンバーと原、メンバーの家族たち。

荒川「乾杯の挨拶している荒川。」

荒川「は勝ち取ることはできませんでした。是非来年は無理無理無理。」

荒川「でも『シャインマスカッツ』には二軍もできなかったことだし。」

公佑「エッ、いつから二軍になったのさ。」

悠輝「関係ないじゃん。」

翔「おお、神よ。」

史貴「南無妙法蓮華経……」

荒川「抗議のため荒川に詰め寄ることもたいた。」

美奈「ちよつと、聞いてないよ。」

真理「家族旅行はどうなるのよ。」

抗議のため次々と立ち上がり荒川に詰め寄る妻たち。

騒然とする会場でビールを飲みながら

荒川「お、いい筋してるぞ、おまえら」  
 原「お、いい筋してるぞ、おまえら」  
 会場の人々、静かに話を聞いていた。  
 操作している亜紀奈。揉まれながら、  
 こどもたち、妻たちには揉まれながら、  
 シヤインマスカツツは永遠に不滅で  
 「乾杯!!」  
 ち上がり、マスカツツのメンバー立  
 収拾つかなくなった会場だが、「シ  
 ヤインマスカツツ」のメンバーは誰も  
 が楽しそうに笑っている。  
 会場の全員を家族単位で一人一人静  
 画で捉え、家族単位で一人一人静  
 エンドロールが流れ始める――。  
 了